

ポエムをラブレターと勘違いしたダウナー系ヤンキー女が、ヤンデレで怖すぎて、とても勘違いだと言いつけないうちに、脳がとろける耳舐めといちゃラブ性技で、ついつい流され、どんどん取り返しのつかない状況に追い込まれていく日常。

◆第1章 ヤンキーの黒木さんに、ポエムを読まれてラブレターと勘違いされたけど、余りに怖くて言い出せないまま付き合うことになってしまったが、やっぱり、勇気を出してなんとかひとこと言おうとするも、初めてのデュープキスに、何も言えなくなってしまった童貞の、ある日の放課後。

『ガラガラっ』

「よお……………」

「これ……………」

「うん、アンタが書いたやつ……………」

「うん」

「……………読ませてもらったよ……………」

「こんな手紙、貰った事なかったから……………ふふっ……………最初はなにかと思ったよw」

「でも、私、あんな……………ロマンチックなこと言われたこと無いから……………嬉しかったよ」

「私も、口下手だから、上手に喋れる人……………すごいと思うし……………」

「アンタ、すごいよ」

「テレビとかで、流れてる、人気の歌とかみたいだった」

「うん……………」

「だから……………」

「オッケー……だよ……付き合うの……」

「だから……彼女になってもいいって事だよ」

「ふふ……」

「……」

「………私の、笑った顔が見たいって書いてただろ？」

「だから……笑ってみた」

「……変だったかな？」

「ちょっと頑張ったけど……」

「でも、無理やりじゃないぞ」

「ホントに、ちょっと楽しいんだ………今」

「今まで、あんまり恋愛とか、上手くいったことが無かったから……」

「もう恋愛とかしなくていいかなって思ってたんだけど」

「アンタみたいな人なら、上手くいくかもしれないって思うよ」

「ん？ なに？」

「聞いてほしいこと……？」

「なに？ また、喜ばせてくれるのか？」

「あ……ちょっと待って」

「その前に一つ、いいか？」

「ん……」

「私……裏切りとかは、許さないから……」

「…………裏切ったら、アンタを殺して、私も死ぬよ……」

「言葉のあやかじゃないよ」

「浮気とか……裏切りは……」

「マジで殺すから……半殺しとかじゃないよ。全殺しだから……」

「……………」

「ん……」

「そうだよな……」

「あれだけ愛してるって言ってくれたんだから……浮気なんて、しないよな」

「ごめん……」

「実は……気が、弱いんだよ」

「もう、アンタのことしか考えられないぐらい、心、持ってかれちゃってるから……」

「裏切られるのが、怖くなっちゃってるんだ」

「今まで、裏切られたことでもあるし……」

「誰かと一緒にいたい気持ちはあるんだけど……裏切られるのが怖くて……」

「だから、アンタとは一生、一緒にいるつもりなんだ」

「アンタもそう言ってくれただろ？」

「一生、一緒に寄り添っていたって……」

「なにがあっても私だけを見てるって……書いてくれたから……」

「心に……響いたよ……」

「……」

「あ……」

「で？ 聞いてほしいことって何？」

「……え？ 忘れちゃった？」

「そっか」

「……」

「あ………そうだ……」

「私、男友達とか………縁きるから」

「うん」

「携帯から、今、全部、削除するからな」

「私にはアンタだけいいから……」

『ピッ……』

『ピッ…ピッ……』

『ピッ……』

「はい」

「できた」

「ほら……もうこれで、携帯、誰も入ってないよ」

「あ、これは、お父さんね……私と苗字、同じでしょ？」

「あんまり、かかってこないけどな」

「じゃあ……次は、アンタの番……」

「ん？」

「なに？」

「予備校の友達……？」

「勉強するのに、なんで友達がいるの？」

「受験の情報交換……？」

「そうなんだ……」

「つつ……そ、っか……」

「私を幸せにするためにも、学歴が必要なんだな……」

「じゃあ……しょうがないか……」

「でも、それ以外のやつは、消せるよな」

「……… 必要ないもんな」

「ん………じゃあ、消して……」

『ピッ……』

『ピッ……』

『ピッ……』

『ピッ……』

「……………」

「ん…………消えてるな」

「良かった」

「ん？」

「何が良かったかって……………」

「いや……………渋ってたからさ……………」

「さっそく浮気かと思っちゃって……………」

「ごめんな、疑っちゃって」

「ん、ごめん……………」

「反省してるよ」

「……………殴っても、いいよ」

「悪いの、私だし……………」

「え？ いいのか？」

「やさしいんだな……………」

「……………ん、わかった……………」

「信じるよ」

「本当に、信じる……」

『ガタっ』

「え？」

「これ……」

「これは、トンカチだよ」

「え？」

「なんで捨てたかって……」

「そりゃ……いらなと思ったから、捨てただけど……」

「変なこと、聞くんだな」

「……どうしたの？」

「………え………これ、燃えないゴミじゃないのか？」

「プラじゃないから、ダメなんだ……」

「そっか……」

「うん。わかった。じゃあここに捨てるのはやめるよ」

「なんか……いいな、こうやって、間違いを正してくれる人が身近にいるってさ」

「正しさを教えてくれる人がいるって、いいよな」

『ガサガサ……』

「え？」

「私の代わりに、ゴミ箱から拾ってくれるのか？ 処分も、しといてくれるの？」

「……………もしかして……………私が、汚れないために？」

「つつ……………つつ……………」

「嬉しい……………」

『ぎゅううううう』

「好き……………」

「私、もうアンタのこと、好きすぎてヤバイみたい……………」

「このまま、もう離れたくない」

『ぎゅううううう』

「駄目、離さない……………」

「え……………？」

「予備校……………？」

「このあと？」

「……………そうなんだ……………」

「悲しいな……………離れるのは」

「うん……………」

「二人の幸せのためだもんな」

「仕方…ないよな……」

「じゃあ、少しの間………我慢するよ」

『さっ』

「ん………」

「勉強、がんばって……」

「あ………」

「どこで待ってればいい？」

「え？」

「いや………」

「予備校のあと、会う場所だよ」

「決めとかないと会えないだろう？」

「え？　なんで決めないの？」

「……あ………」

「そっか………」

「そうだよな……スマホがあるもんな」

「私、ほら、あんまり待ち合わせとかしないからさ」

「てっきり、待ち合わせしなかったら…会えなくなっちゃうかと思って……」

「え？　話をきくのか？　なに？　さっきの、思いだったの？」

「うん……なんだろう……」

「ふふ………」

「あ、そのまえに………」

『ちゅっ………』

「ん………」

「ふつうキス、するだろう？」

「恋人なんだから………」

「もっと、しょ………」

『ちゅ………ちゅ………』

『ちゅぶっ………』

「もっと………舌、出して………」

『ちゅぶっ………ちゅっ………』

『れろ、えろ………』

『ちゅぴ………』

「(はぁ………はぁ………)」

「ん？」

「なんで急になって………だって………しなくなっちゃったから………」

「あ………」

「話って、なに？」

「え？」

「また忘れちゃったのか？」

「そっか……」

「……うん」

「行ってらっしゃい」

「何時間も、離れるの……寂しいけど、我慢するよ」

「頑張って……」

◆第2章 無断でサムターン回しで鍵をあけ、押しかけ女房してきた黒木さんに、食後、勇気をだしてハッキリひとこと、言おうとするも、黒木さん的には恋人ならあたりまえの、恋人ご奉仕セックスがはじまり、何も言えずに耳元でエッチな言葉を言われ続けて射精するある日の、夜。

『ガチャ』

「あ、おかえりー……」

「ん？」

「何って？」

「あ……これ？」

「これは……お味噌汁だよ」

「すぐ作っちゃうから、待ってて」

「え？」

「いや……スマホに連絡が無かったから、忙しかと思って、家で待ってたんだけど……」

「……だって、待ち合わせも決めてなかったし……」

「鍵？」

「うん……貰い忘れてたから、あけたよ」

「え？ どうやって……」

「鍵の開け方とか、興味あるのか？」

「なんで？ ダメだぞ？ 犯罪に使ったら……」

「ん？」

「なに？ 改まって……」

「話？」

「え？ 包丁？」

「置くのか？ 持ったまま話さないでほしいの？」

「なんで？」

『こぼこぼこぼ……』

「あっ……ごめん、火、とめないと………」

「ちょっとソファに座って待ってて」

『タタタタっ……』

……

……

……

『カチャッ……コトっ……』

「ふふ………」

「美味しかった？」

「そっか……良かった」

「え？」

「そろそろ……？」

「……………あ、ごめん……………」

「私……………気づかなくて……………」

「うん……………そうだよね……………」

「いつのまにか、もう結構な時間になっちゃって……………」

「じゃあ……………」

『しゅる……………』

『しゅる……………パサッ』

「ん？ なにって……………」

「そろそろって言ったのは、アンタだろ？」

「ちゃんと、床の準備もしてあるし……………」

「するっていったら、セックスだろ？」

「どうした？」

「何か、他にすることあるのか？」

「あ……………」

「そうか、歯磨きか……………」

「なるほど……………」

「うん。そうだな」

「私が間違ってたよ」

「確かに、まずは、歯磨きからだな……」

「ん？」

「ふふ……目のやり場に困るか？」

「勝負下着なんだ、これ……」

「ちゃんと、シコい…かな？」

「こういうの、好きかなと思って……」

「……そっか……良かった」

「喜んでくれたなら、嬉しいよ」

「……じゃあ、一緒に、歯磨きしてから、寢床に行こう」

「ふふ……」

「今夜は、いっぱいかわいがってくれよ」

……

……

……

『しゃー……』

『キュツ……』

『シャカシャカシャカシャカ……』

……

.....

.....

「さて………」

「やろうか」

「ん」

「ほら……口あけて………」

「キスだよ」

「それとも、舌で、こじあけてほしいのか………？」

「なんだ………」

「もしかして………アンタ、童貞なのか？」

「そ、そうなんだ………」

「じゃあ、私が最初の女で………」

「そして、最後の女になるわけだな………」

「ふふ………」

「それは、嬉しいな」

「ん………」

「まずはキスからするからな」

「口開けて………」

「少し、舌、だして……」

「そう……」

『ちゅっ……』

『れろっ……れろ……』

『じゅぶっ……』

「(はぁ……はぁ……)」

「ん……」

『ちゅっ……』

『れろっ……れろ……』

『じゅぶっ……』

「ふふ……」

「情熱的だな…」

「私の事が、それほど好きなんだな」

「ん？」

「どうした？ 緊張してるのか？」

「そっか……」

「……大丈夫」

「私に任せて……」

「エッチなこと、いっぱい言ってあげるから……」

「そしたら、すぐエッチな気分になるぞ……」

「耳元で、言ってあげる……」

「ん……」

「乳首、好きだろ？」

「乳首……触りながら、エッチな言葉、言ってあげるからな」

『ふうふううう』

『あむうっ……れろれろ……くちゅっ……びちゅっ……』

「いまからあ……」

「なにするか、よく、かんがえて……」

「私と、何するのか……よく、思いだして……」

「アンタの……」

「その逞しい暴れん棒で……」

「私の、濡れ濡れおマンコに……突いたりい……引いたりい……突いたりい……引いたりしてえ……」

「腰をへこへこ、へこへこしてえ」

「二人で、猿みたいに……パコリまくって一緒に、気持ちイイになってえ……」

「アンタの精子タンクから、私のおまんこに、白くてえ……エッチな赤ちゃんのもとを……」

「ぴゅうううううつつて……」

「私に種付けするんだよ……」

「ん……」

『ふうううう………』

『ああむうっ………ぴちゅううっ………』

「もっともっと……チンポきもちいいになるためにい……」

「キスとかしたり………」

「私のおっぱいとか、触ったり……揉んだりとかして……」

「もっともっと、チンポきもちいいになるんだよ……」

「私の……Fカップのおっぱいに……」

「おちんちん挟んだりとかして……私の事、エッチなおとなのおモチャにして、チンポきもちいいにしていんだよ」

「私は、アンタ専用の、大人のオモチャなんだから……」

「いっぱいチンポきもちいいになってくると、タマキンがフル稼働して、どんどん精子作って……」

「精子タンクに精子ためてえ……」

「最後に……その、タップタプのタマキン……空っぽになるまで、私にザーメン出す遊びしていいんだよ……」

「腰、へこへこお、へこへこおして……」

「最後に私に向かって……」

「おちんちんの先から、ぴゅっぴゅっぴゅっ……」

「好き放題……私の身体にかけたり……中に出したりして、汚しちゃっていいんだよ」

「私の身体は……アンタのエッチな大人のオモチャになるために、Fカップなんだから……」

「ね……」

『ふうふう……』

『ああむっ……ちゅっ……ぴゅっ……』

「ちくび、きもちいいだろ……?」

「ふふ……」

「エッチするときも、ずっと乳首、いじってやるからな……」

「そしたら、いつもより、いっぱい精子でるから……気持ちいいぞ……」

「すっごい、いいの出るから……」

「白くて、エッチなザーメンが、どっぴゅっぴゅっ……残り汁も……びゅるびゅるううって……」

「イイの出るぞ……」

「私も、そしたら、気持ち良くなっちゃって……逝く逝くううって……」

「アンタにしがみついちやうだろうなあ……」

「だって……大好きなアンタに、種付けセックスされてるんだもん……」

「そりゃ、私だって、ただじゃられないよ……」

「逝く逝くううって……天国逝く寸前になっちゃって、キスとか、求めちゃうだろうなあ……」

「逝くとき……キスしながら逝くと……すごいんだから……」

「口も、おマンコと、おちんちんも、繋がっちゃって……」

「全部が、溶けて、すごいアクメで、ビクンビクンってなるんだぞ……」

「子宮とかも降りて来ちゃって……」

「遺伝子の受け渡しが成功しちゃうんだ……」

『ふううううう』

『ああむうっ……れろれろ……ぴちゅっ……』

「今から私と、すること……」

「わかった……?」

「なあ……」

『ぎゅうううっ』

「ふふ……」

「おっきくなってる……」

「すっごく、かたい……♡」

「私と何するか……わかったみたいだな……」

『バサっ……』

『しゅ……しゅっ………』

「ふふ………」

「かあわいい………」

「いっぱい、声だしていいから………」

「我慢しないで………いっぱい喘いだほうが、声と一緒に白いのも………いいの出るから………」

「あ………」

「でも………まだ逝ったらダメだぞ………」

「逝くときは………ちゃんと私の中で逝くんだから………」

「私の身体で、いっぱい気持ち良くなって………最後はしっかり種付けしないと………」

「男なら、キッチリまずは、男らしく白くてたくましいザーメンで………」

「私に、マーキングしてくれ………」

「どっぷり、たっぷり………エグいのを流し込んで………」

「な………」

「ん………」

「口、あけて………」

『ちゅぶ……ちゅば………』

「ふふ………」

「もう、ちょっとキスがこなれてきたな………」

「上手だぞ……」

「気持ち良かった……」

「ふふ……」

「じゃあ……そろそろ、挿れよっか……」

『がさっ……がさっ……』

「んっ……」

「そ、そこっ……」

「そのまま、奥につ……ぐっ、って……」

「んお……お……」

「ふお……お……」

「あ、ああああ、あ、ああ、あああ、あっ……」

「入っ……ったっ……あ、あ……あ……」

「お、ふ……」

「んっ……」

「（はあ……はあ……はあ……）」

「いいぞっ……」

「好きなようにっ……」

「気持ち良くなるように……私のおマンコで、おちんぼしごいてっ……」

「んっ……………」

「あっ…………あっ……………」

「あっ、あっ、あっ…………あっ…………あっ…………あっ…………あっ……………」

「んっ…………あっ…………あ……………」

「気持ちいいっ……………」

「んっ…………お、っおっおっ…………おっ…………っほおおっ……………」

「おうっ…………おっ…………おおおっほお、お……………」

「アンタもっ…………気持ちいい……………」

「私の、おまんこっ……………」

「んっ…………ん……………」

「アンタがっ…………これから一生、使う、おマンコだよ……………」

「はああっ…………あっ…………あ…………んっ……………」

「あっ…………あっ…………あっ…………あっ…………あっ……………」

「気持ちいいだろ……………」

「かずのこ天井なんだよ…………私の、アソコ……………」

「オナホみたいになってるんだよ…………中がっ…………んっ……………」

「絡みついてくるだろ…………おちんぽにっ……………」

「んんっ……………」

「珍しいらしいぞ……」

「すごく、気持ちイイんだって……」

「あっ……はっ、んっ」

「これから一生、好きな時に使っていいんだぞっ……」

「たまったら、すぐ使っていいんだからな、毎日っ……いつでもっ……」

「もちろん……」

「このおっぱいも……」

「全部っ……」

「アンタの…大人のおもちゃだから……」

「あっ……はっ……あっ……」

「くせになっちゃって、いいんだからなっ……」

「これからっ……毎日っ……」

「毎日、やろうなっ……」

「毎日っ……毎日っ……」

「猿みたいに、パコリまくろうなっ……」

「んっ……んっ……」

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ……」

「っっっっっ……」

「あ……」

「私……」

「きちやうっ、かもっ……アクメっ……」

「んおっ……」

「おっ……お……」

「ほおっ……おっ……っほお、おおっ……」

「ダメっ……くるっ……すごいのっ……きちやうっ……」

「アンタの、腰へこっ……激しいからっ……」

「んぐっ……」

「おほっ……おっ」

「っっ……いぐっ……っ……」

「……いっちやうっ……」

「あ、あんたも……？」

「あんたも、逝きそうなのかっ……？」

「ん……」

「じゃあ……」

「一緒に、逝こっ……なっ♡」

「んっ……ん……」

「ひうっうっうっうっう」

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ……」

「アグメっ……ぎぢやうっう……」

「アグメっ……」

「ぐるっ……」

「あふっ……」

「あ……」

「ひあ、あああああああ……」

「いっくっ、う、う、うっ、うっ……」

「っっっっっ……」

「んおっ……」

「おっ……おっ……おっ……うっ」

「おっ……おっ……ほっつお、おお、お、お……」

「効っつ、ぐ、う、ううう……」

「きぼぢいっ……いっ……いっ……」

「あ、へえええ……あ、あ……」

「へあ、ああ……」

「っ……」

「(はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……)」

「っ……きもち、よかった……」

「アへ逝きしちゃった……♡」

「ふふ……」

「アンタは……どうだった？」

「そう……」

「良かった……」

「(はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……)」

『くっちゅ……』

「ぁ……」

「チンポ抜いたら……いっぱい精子出てきたぞ」

「ふふ……」

「すごい量だな……」

「健康優良男児なんだな……」

「ホントに、すごい量っ……孕ませる気、まんまんって感じだな」

「馬並み、っていうのかな……？」

「こんなので毎日出されてたら、すぐ孕んじゃうだろうな♡」

「ぁ……」

「お風呂、どうする？」

「入るなら、沸かすけど……………」

「明日の朝にする？」

「ん？ 私は、明日の朝にしようかな……………」

「え？ 制服とかは、持ってきてるから、大丈夫だぞ」

「鞆もあるし」

「だから、帰らないぞ」

「ん…………一緒に、学校に行けるぞ」

「どうした？」

「ん…？ なんでもないのか？」

「そうか…………」

「…………もっと、ひつついていいか？」

「ん…………私は、もっとくつついて寝たいぞ」

「ん…………ふふ…………」

「幸せだな」

「…………おやすみ…………」

◆第3章 無断で自分の両親と交友を深めている黒木さんに、休み時間、今度こそハッキリひとこと言おうとするも、人気のない所に連れ込んだ理由を勘違いされ、恋人の責務として始まる耳舐めからの、耳元好き好き連呼手コキの性欲処理アタックに、結局、いつのまにか何も言えなくなる、ある日の、休み時間。

『ガチャ……』

「今日も、いい天気だな……」

「……」

『ボタンっ』

「一緒に登校できるから、毎日、登校も楽しみだな」

「え？」

「家？ いや、別に、帰らなくても大丈夫だぞ」

「言っているし」

「うん……」

「
p
r
r
r
r
r
r
r
r
r
r
r
r
r
r」

「あ……ちよつと、待って」

『ぴっ』

「はい、もしもし……」

「はい……」

「はい」

「あ、はい……今から学校に行くところです」

「はい」

「大丈夫ですよ」

「あ、みかんおいしかったですか!？」

「嬉しいです」

「はい、田舎から送ってくるのが余ってて……」

「はい」

「はい」

「はあい……また、電話します」

『ぴっ……』

「ふう……」

「え？」

「ああ……」

「今のは、アンタのお母さんだぞ」

「ん？」

「いや……アンタが予備校行ってる間に、挨拶に行ったんだ」

「結婚を前提にお付き合いさせていただいているって……」

「うん」

「昨日だぞ」

「どうした？」

「あ……」

「孫の顔がどうこう言ってたから……子作りには、ちゃんと励みますって一応……」

「え？ なに？」

「話……？」

「うん……いや…、でも……そろそろ急がないと遅刻じゃないか？」

「話は、また後でだな」

「昼休みにでも……な」

……

……

……

『キーンコーンカーンコーン……キーンコーンカーンコーン……』

『ぎい……』

『ボタン』

「どうした？ 昼休みになるなり……こんな、ところに連れ込んで……」

「ふふ……」

「魂胆は、わかったぞ」

「もう、我慢できなくなっちゃったんだろ？」

「昨日も、あんなにいっぱいパコったのに……」

「すごい性欲だな」

「ふふっ……」

「恥ずかしがらなくてもいいだろう……スケベなのは、いいことだ」

「私は、好きだぞ……スケベな、アンタが……」

「違わないだろう……」

「スケベだろ、アンタは……」

「おちんぼミルクを、びゅううってしたくて、私を連れ込んだんだろ？」

「ふふ……」

「でも、さすがに学校で、パコるのは危ないからな……」

「家に帰ったら、また好きなだけパコっていいから……」

「今は、手で我慢してくれ」

「ほら……壁に、もたれて……」

「耳、舐めながら……手でしてあげるから……」

「ん……」

『ふうううう』

『れろれろ……くちゅっ……びちゅっ……』

「ふふ……」

「気持ちいいか？」

「舌使いのテクニックは、良い妻のたしなみだろ？」

「アンタの、良い妻になりたいからな……」

「でも、ガツコでは、声は、我慢しろよ……」

『カチャ……かちゃ……』

『じじじ……』

『ガサガサ………パサっ……』

「ふふっ……」

「学校なのに、こんなにしちゃって……」

「スケベだなあ……」

「私の夫は、とってもスケベだ……」

『しゅっ……しゅっ……』

『しゅっ……しゅこっ……』

「ん？　なんだ？」

「どうした？」

「話があるのか？」

「じゃあ、一回、やめるか？」

「……ん」

「そうか……やめないんだな」

「わかった」

「じゃあ、いくぞ」

『れろ………れろ………くちゅっ………ぴちゅっ………』

「んっ……きもちいいだろ……？」

「つばも、垂らして、すべりを良くしておこう……」

『へっ……』

『ん……へっ……ん……ぺっ……』

「これぐらいで、いいかな……」

『じゅぶっ……じゅぶ……』

「ほらっ……すべりが良くなった……」

「皮でやるより、直接、カリ首じゅぼじゅぼしたほうが、気持ちいいだろ？」

「ふふ……」

「耳もか？」

「わかった、わかった……」

「いくぞお……」

『れろれろ………くちゅっ………ぴちゅっ………れろれろ………』

「じゃあ……」

「持ち替えて……」

「反対も……」

『れろれろ……くちゅっ……ぴちゅっ……ああむうっ……ひっ……』

「ふふ……」

「つばも足しとくか？」

『へっ……』

『ん……ぺっ……ん……ぺっ……』

「ん……ぺっ……」

「すべりが、だいぶ良くなったな……」

「尿道周りとかも、カリ首と一緒にごしごししてあげるからな……」

「気持ちイイだろ……尿道周り……」

「ほらっ……動くなって……」

「我慢しろよ……」

「男だろ……？」

「そうだっ……しゃんとしろ……」

「私のこと、つかんでいいからな……」

「がんばれっ……」

「歯をくいしばって……」

「そうっ……」

「ん……できるじゃないか……」

「かっこいいぞ……」

「男らしい……」

「素敵な夫だ……」

「じゃあ、また、いくぞ……」

『んっ……ああむう……れろれろ……くちゅっ……ぴちゅっ……』

『ふううううう……』

『ああむっ……れろれろ……くちゅっ……ぴちゅっ……れろれろ……』

「はあああ……」

「だいぶ、仕上がって来たな……」

「そろそろ逝きそうか？」

「おちんぼミルク……あんまりまき散らすと、掃除が大変だから……」

「逝くときは言ってくれ」

「私が、手で抑えるからな」

「……大丈夫……言える」

「アンタなら、言えるよ……」

「逝く前に、ちゃんと言える……」

「大丈夫だ……」

「男だろ？」

「できるよ」

「アンタは……できる男だよ」

「逝く前に、言える……」

「愛してるぞ……」

「ん？」

「なに？」

「今の……？」

「もっと言ってほしいのか？」

「ああ……『愛してる』が、効いたのか？」

「そっか……」

「わかった……」

「あいしてる……あいしてるぞ……すつごく、愛してる……」

「死ぬほど、愛してる……、いつだって愛してる……」

「ちょお愛してる……めっちゃ愛してる……愛してる……」

「好きっ……」

「好き好きっ……」

「大好きっ……」

「好きっ……好きな人の、おちんぼにご奉仕できて、幸せっ……」

「好きな人の、おちんぼご奉仕……毎日したいっ……」

「好きな人の、おちんぼに、おてと、口と、おまんこで、ご奉仕したい……」

「おっぱいでも、ごほうししたい……」

「好きっ……愛してるっ……好きっ……」

「好き好き好き好き好き好き好き好き……」

「だあいすぎ……」

『ああむううつ……ちゅううつ……れろれろ……くちゅっ……ぴちゅっ……』

「んっ……」

「わかった……」

「つつ……あっ……あつつ……」

「すごいな……」

「ザーメン……すごい勢いで出たなっ……」

「しかも、この量……」

「馬並みだな……」

「こんなの、手で抑えてなかったら、大変だったぞ……」

「ふふ……」

「なんだ、ボケた顔しちゃって……」

「でも……ちゃんと、逝く前に、言えたじゃないか……」

「偉いな……」

「偉いぞ……」

「精子がついてないほうの手で、撫でてやる」

「えらい、えらい……」

「ふふ……」

「ん……」

「でも、そろそろ休み時間も終わるから、戻らないとな」

「ふふ……」

「また、家に帰ったら、いっぱい、やればいいだろ」

「家だったら、おまんこも使えるし……口とか、おっぱいも使って、いっぱい気持ち良くなるぞ」

「楽しみだな」

「授業が終わったら、早く、帰って、いっぱいエッチなことして遊ぼうな」

「……ふふ」

「じゃあ……教室に戻ろう……」

◆第4章 無断で住所を移転してきて同居を始めてしまった黒木さんに、さすがに、ひとこと言おうとするも、運び込まれた荷物の中にあったマットプレイ用のマットとローションで、ソーブランドプレイをしてもらうことになり、そのままオホ声セックスに突入。かずのこ天井の黒木さんのアソコにガツツリ種付けセックスをして、結局なにも言えなかった、あの休日の昼。

『ぴんぽーん』

「はあい」

『ガチャ』

「あ、はい」

「ありがとうございます」

『ボタン』

「ん？」

「どうした？」

「え？ これ？」

「通販で買ったのが、届いたんだ」

「え？ 住所？」

「ああ………私も一人暮らしだったから、そっちはもう、引き払ったぞ」

「うん」

「もともとあまり、物は持たないタイプだから」

「身軽なんだ」

「ん？　なんだ？」

「話？」

「わかった……なんだろうな」

「あ、その前に、これだけ、開けてもいいか？」

「段ボールとかは、なるべくすぐ片づけてしまいたいんだ」

「ん……」

『ガッ………』

「ふふ……」

「ん？」

「これか？」

「これは………マットだぞ」

「ほら、アンタ、最近、風俗ものが好きだろ？　だから……」

「え？」

「アンタの持つてるAVだよ」

「最近、風俗ものが……」

「え……？　いや……アンタのパソコンに入ってるだろ？」

「私がないとき、一人で見てるやつだよ」

「最近、風俗もののAVで、センズリこいてるだろ？」

「何回でもシコれる、とかいって……」

「パスワード？」

「ああ……まあ、それは指の動きを見ればわかるから……」

「ん？ 指の動きは、カメラに写ってるぞ」

「カメラは、ほら、そこ……あとは、その火災報知器の中とか……」

「あとは……」

「え？」

「いや……そりゃ、撮るだろ」

「アンタの顔は、いつでも見てたいだろ」

「……なに？ 言いたいこと？」

「ああ……」

「もしかして……」

『ガサガサ……』

「これ、か？」

「大丈夫、ほら……ちゃんと動画にも出て来たローションも買っておいたぞ」

「この上で、ローションまみれになって、とろっところになったところを……」

「いっぱい、淫語を耳元でいいながら……攻めてあげるからな」

「ヌルヌルにしたら、きっとマスターよりずっと、気持ちイイぞ……」

「ぜったい、いつもよりいいのがいっぱい出るぞ……」

「ふふ……」

「どうする？ さっそくやるか？」

「そうか……じゃあ、準備するな……」

「ふふ……」

「楽しみだな……」

……

……

……

『ブピュッ……クチョッ……チュパ………』

「ふふ……」

「もう全身、トロットロだな……」

「ビニールのマットどう？」

「イイ感じ……？」

「エモいか？」

「ふふ……」

「そっか……良かった……」

「じゃあ……私も………」

『ぬちよっっ……………』

「ふふ……………」

「ぬるぬるの……………」

「ぽよんぽよんだな……………」

『にゅちゃ……………』

「どうだ？」

「…………私の身体……………」

「きもちいいか…………？」

「ん……………」

「じゃあ、うごくぞ……………」

「A Vの動きを再現するからな……………」

『じゅぶっ…………じゅぶっ…………』

『ぴちゃっ…………にゅぶっ…………』

「あんっ……………」

「ん…………ふふ……………」

「これは、私も…………ちょっと感じてしまうな」

「すごい滑らかに滑るんだな……………」

「乳首と、乳首が…………こすれちゃうな……………」

「あ……」

「まだエッチな言葉とかも言っていないのに……」

「今日はもう、ガチガチに勃起してるんだな……」

「ふふ……」

「やっぱり、こういうの、好きなんだな……」

「ん……」

「毎日マスタベしてたもんな……」

「白目むきながらっ……必死でこいてたから……」

「見てて可愛くてな……」

「ん？」

「なんだ、恥ずかしがって……」

「別にいいだろ、オナニーぐらい……」

「オナニーなんて、マッサージみたいなものだろう？」

「このぐらいの年齢の雄なら、逆に……毎日コいてるほうが普通だろ？」

「どんどん精子が溜まっていくのに、抜かないでいたら、クラスには……女子も沢山いるんだし……」

「気が狂ってしまうだろ？」

「それに……」

「私たちは、つがいなんだから……な？」

「だろ？」

『じゅぷっ……じゅぷっ……』

『ぴちゃっ……にゅぷっ……』

「ふふ……それにしても……」

「おっぱいが、ところてんみたいに滑るな……」

「摩擦係数がほとんど無いぞ……」

「全身が……全部、大人のオモチャになったみたいだ……」

「こういうのも……たまには、いいな……」

「ん……」

「いや……アンタがしたければ、毎日でもいいけどな……もちろん」

「私は、アンタ専用の大人のオモチャなんだから……」

「ん……」

「あっ……んっ……」

「(はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……)」

「やっぱり、これ……私も、きもちよくなってきちゃうな……」

「あんっ……あっ……あっ……」

「感じちゃう……♡」

「ふふ……」

「次は、膝の裏で、アンタの、チンポを挟んで……しごくぞ……」

『ぐちゅ……ぐちゅ……ぐちゅ……』

『レロレロ……ちゅっぱ……くっちゅ……』

『はああ………』

「かわいい声だしちゃって……」

「かわいいな♡」

「いまごろ、精子タンクが……私に種付けしようと目論んで、必死に精子を作ってるのかな……？」

「ふふ………」

「そろそろ………」

「挿れようか？」

「もう………」

「けっこう仕上がってきちゃってるだろ……？」

「このままだと……逝っちゃうんじゃないか……？」

「最後は……やっぱり………」

「おまんこの中で逝きたいだろ……？」

「ん………」

「じゃあ、今日は……風俗プレイだから………」

「私が上になるぞ」

「ん…………ふふ…………」

「つるつる滑るなあ」

「ん…………よし…………」

「挿れるぞ……」

『くっちゅ…………くっちゅ…………』

「ンオっ…………おっ…………」

『くっちゅ…………くっちゅ…………』

「おっ…………おっ…………ほっ…………おっ…………」

『くっちゅ…………くっちゅ…………』

「奥までっ…………くるっ…………んっ…………」

「(はぁ…………はぁ…………はぁ…………はぁ…………はぁ…………)」

「うごくぞっ…………」

「んっ…………」

「ンっ…………んっ…………あっ…………あっ…………あっ…………あっ…………あっ…………」

「(ふーっ…………ふー…………ふー…………ふー…………ふー…………)」

「気持ちイイっ…………」

「んっ…………あっ…………あっ…………あっ…………んっ…………あっ…………んっ…………あっ…………んっ…………あっ…………」

「アンタも、きもちいい……?」

「この動きで、大丈夫っ……?」

「動きたかた、変えてほしかったら……言ってっ……」

「ンっ……んっ……」

「はあ、ああ、ああああっ、っんっ……」

「あっ……あっ……あっ……あっ……あっ……んっ……」

「ああああっ……幸せっ……」

「私っ……幸せだぞっ……」

「好きな人と……毎日っ……営めるの、幸せっ……」

「猿みたいに、毎日、営みまくるのっ……好きいい、いいっ……」

「はんっ……あんっ……あっ、んっ……あんっ……あんっ……」

「ひあ、あああああああっ……」

「ちよう……気持ちいいいい、いいいいっ……」

「ぐりぐり腰、グラインドするのっ……とまらない、いいっ……」

「あああゝあああゝあゝっ……んっ」

「(ふーっ……ふーっ……ふーっ……ふーっ……)」

「奥まで刺さってるからっ……この体勢っ……」

「この状態でゼロ距離射精されたらっ……」

「~~~~~」

「あゝ~~~~~」

「すごいっ」

「きちゃうっ」

「アグメっ……アグメぐるっ……」

「すごいアグメっ……」

「んおっ……おっ……」

「~~~~~」

「ふお、お、っ……おお、お、っ……うほ、お、お、お……」

「あっ、っ……」

「……出てる、っ……」

「効っ、ぐ、う、ううう……」

「へあ、ああ、ああ……」

「……」

「(ひっひっ……ひっひっ……)」

「(ひー……ひー……ひー……ひー……)」

『じゅぽっ……』

「——っ……ぎ、きもちかったあ……」

「ふへっ………」

「精子……出てるの、わかったよ」

「ゼロ距離射精で、子宮に…直接種付けされてた……」

「これは、もう、受精してしまってるかもな……」

「ふふ………」

「幸せだな………」

「ふふふ………」

◆第5章 エピローグ。差し出された記入済み婚姻届。

『コト……………カチャ……………』

「ケーキ、どれくらい食べれる？」

「半分、いける？」

「ん、わかった……………4分の1だな」

「ふふ……………」

「誕生日を、こうやって、二人でお祝いできるってのは……………いいものだな」

「あ……………」

「アンタの誕生日なのに、私に逆サプライズしてくれたら？」

「嬉しかったよ」

「ありがとう」

「ん？」

「ラブレターだよ」

「くれたら？」

「また、付き合ったときと同じ方法で渡してくれるなんて……………ロマンチックなんだな」

「ん？ ズボンのポケットに入ってたぞ」

「そんなとこまで調べるの、私ぐらいのものだから……………」

「つまり、私へのプレゼントだろ」

「私には、わかってるから安心しろ」

「……………ん？」

「どうした？ 変な顔して…………」

「あ……………わかった」

「私からのプレゼントだな？」

「大丈夫、用意してあるよ」

「ほら…………」

『カサっ…………』

「ふふ…………」

「アンタが一番欲しいのは…………」

『カサっ…………』

「これ…………」

「ん…………？」

「婚姻届けだぞ…………」

「今日でアンタ、○8だろ？」

「もう私は、○8だから…………」

「できるだろ？ 入籍…………」

「…………」

「何か問題……」

『かきかき、かきかき……』

「あら……」

「え？ いや………」

「アンタのことだから、こういうとき……ほら……」

「いつも……なんか話があるとかなんとか、言いだすだろ……？」

「だから……」

『かきかき、かきかき……』

『カタツ……』

『カサっ……』

「え？」

「あ……かけた？」

「うん……ありがと」

「え？ 話はないけど……」

「セックスしたいの？」

「う、うん……」

「も、もちろんいいけど……」

「まだ昼だけ……」

「え？ 昼も夜もするの？」

「い、いや……もちろん、いいけど……」

「ス、スケベなんだな」

「いや、スケベはいいことだけれども……」

『ガサガサ……ガサガサ……』

『ボスンっ』

「きゃっ」

「っ……」

「ふふ……」

「押し倒してしまった……」

「このままでは、犯されてしまうぞ」

「んふふ……もちろん、望むところだ」

「このまま犯されて、種付けされてしまおうと思うぞ」

「ふふ……」

「んっ……」

『ちゅっ……ちゅぱっ……』

「……キス、上手になったな……」

「本当に上手だ……」

「口の中に……幸せがいっぱいだ」

「ふふ……」

「来年も、一緒に、誕生日をお祝いできたらいいな」

「……」

「そ、そうだな……来年も、再来年も、ずっと、だな……」

「な、なんだか今日は、すごく積極的なんだな」

「いや……嬉しいぞ」

「うん……」

「大好きだぞ」

「ふふ……」

「本当に、幸せだな……」

「あ……♡」

「あんっ……♡」

「はんっ……あっ……はっ……あ、あっ……あっ……あっ……あっ……ああああああん♡」